

# 寒橋

山本周五郎

青空文庫



お孝はときどき自分が恥ずかしくなる。鏡に向つているときなど特にそうだ。

「——まあいやだ、いやあねえ」

独りでそんなことを呟つぶやいて、独りで赤くなつて、鏡に写つている自分の顔を、一種の唆そそられるような気持で、こくめいに眺めまわす。全般的に見て、いやな言葉だけれども、膏あぶらがのつてきている。皮膚が透すけるようなくあいで、なにかの花びらのように柔らかくしつとりと湿つていて、撫なでると指へ吸すいづくような感じである。

或る気分としては眼をそらしたい。良人おととというものをもつて半年あまりになるが、そのあいだに自分の軀からだにあらわれた変化は、これには自分としても銜てれて、頬の熱くなること  
がしばしばあつた。

——いやあねえ。

こう思うのはそのままの実感である。胸乳むなちちのたつぷりした重さ、腰まわりのいっぱいな緊張感、痛いほど張つた太腿ふともも。そのくせ胴は細く緊つて、手足も先端にゆくほどすんな

りと細い。その膏の乗って肥えた部分と、反対に細く緊った部分との対比が、娘時代とはあきらかに違ったもので、つい頬が熱くなり、眼をそらしたくなるが、じっさいは胸がどきどきし、唆られるようなふしぎな気持で、いつまでも眺め飽かないのであった。

「——ふしぎだわ、女の駆つて、……どうしてかしら、ほんとにいやだわ」

いやだと云いながら、しかも一方では、いくら眺めても眺め飽きないのである。

「——なにをしているんだ、またそんな恰好で、肌をいれたらどうだ、風邪をひくじやないか」

父親に叱られて、はつとして、そのくせ自分でもわざとらしいほどおちついたすまじょうで、ゆつくりと着物の袖へ手を入れる。毎々のことだがこれもじつは恥ずかしい。母親がはやく亡くなったせいだろう、まえには父親のほうで気にして、髪結いにゆけとか、白<sup>お</sup>粉<sup>しろい</sup>の刷<sup>は</sup>きかたがぞんざいだとかよく云われたものだ。

——母親がいないと娘はじじむさくなるつて、世間ですぐに云われるんだから、……いつそ白粉をつけないならつけない、つけるなら娘らしくちゃんどつけるがいい。

——今日はこれでいいのよ、今日は白粉ののりが悪いんだもの……それに天気がこんなでくさくさしているのよ、こんな、……白粉なんかどっちでもいいわ。

——それじゃあ済まないんだ、女の化粧というものは世の中の飾りといつてもいいくらいで、うす汚ない饅すえたような裏うら店だなでも、きれいに化粧をした女がとおれば眼のたのしみになる、……いつときその饅すえたような裏店が華やいでみえる、……つまり春になつて花が咲くように、世の中の飾りの一つになるんだ、……化粧をするんならそのくらいの気持でするがいい、おまえのは自分本位で、そういう気持はなおさなければいけない。この種の問答が幾たびかあった。

——まあいやだ、世間の飾りだとか人の眼をたのしませるなんて、あたし聞くだけでも胸がむかむかするわ。

お孝は謙うっせのないうところこう思っていた。それが時とき三ぞうを婿にとつてから変つた。父親の云つたことは本当らしい、髪をいじり化粧をするとき、ふと気がつくとき時三の眼で自分の髪かたちや化粧の効果をみている。時三はむくちでなにも云わないが、化粧が気に入つたときはほうという眼つきをする。

——あざやかだね、眼がさめるようだね。

そんなふう云っているのがわかる。くち上手な者の百千言よりも、良人のそういう眼つきのほうが含みがあつてよほどうれしい。またおたみを伴つれて買物に出るときなども、

人に振返つて見られたりすると張合があつた。……むすめ時代には自分のきりよう縹緞にひかれるのだと思つて、いやでないまでも愉快な気分にはなれなかつた。しかし今では自分が誰かの眼をたのしませるといふことが、或る程度まで逆に自分をたのしくさせるようになった。そんなこともしぜん化粧が念入りになつた原因かもしれない。

——げんきんなものだ。

父親がそう思つているような感じである。氣の勝つたお孝には恥ずかしいが、いろいろな面で云つて恥ずかしいが、どうしたつて鏡に向うことが多いし、その時間が長くなるのは、これは自分でもいまさらどうにもならない。——春が来て花が咲くようなものだもの、いいじゃないの。などといつそ肚を据えたかたちであつた。

「どうするの、お父つあん、夜釣りにゆくんならお弁当のしたくをするけれど」

「——時三はあした休みじゃあないのか」

「いやよ、あしたは六間堀けんぼりへ菊見にゆくんですもの、釣りになんぞさそいだしちやだめ

よ」

「——まるつきり独り占めだ」

「いいじゃないの夫婦ですもの、お父つあんの御亭主じゃあるまいし、……その代り今夜

はおいしい物をおごつてあげるわ、お父つあんの大好きなおいしい物、ね、いいでしょ」

二

本所ほんじよ六間堀と森もり下したにまたがつて、植うえ辰たつという大きな植木屋がある。そのころ菊は染井というのが一般的であつたが、数年まえから植辰でも力みだして、一種の風格ある花壇を作つて展観させた。大輪とか変り咲きとか懸けん崖がいなどの、人工の加わつたものは少ない、ごくありきたりの種類をごく怠慢にそだてたふうである。その方面に眼のない者は多少失望した。出来そくないなどと放言する者もあつた。けれども文人雅客とか幾らかひねつた趣向を好む人々は、つまり具眼の士は感服した。

——野のふぜいですな、よくうつしましたな、どうもなんとも云えぬふぜいですな。

——菊はこう作るのが本筋である、乱菊、これが自然である、染井のなどは邪道であつて、あれなどは花を片輪にしたものである、おれとしてはこれなら飲める。

菊を飲むわけではない。菊をさかなにして酒をやろうというのである。そこで植辰がわでは花壇の要所とおぼしき処々へ茶店を設けた。そのうちに四つ五つ小座敷のあるのも建

て、そこではちよいとした女などもいるし、きどったような料理などもできる。……お孝は時三といっしょにその茶屋のひと間を借りて、持って来た重箱を開いたり、またその家<sup>うち</sup>の料理など注文したりして、二人で菊を眺めながら半日を過した。

「あたしこのごろ死ぬのがこわくてしようがないの、ねえ、あんたそう思わなくって」

「——軀のぐあいでも悪いのか」

「そうじゃないの、死ぬばあんたと別れ別れにならなくちゃならない、顔も見られないし話もできなくなるわ、そう思うと死ぬのがこわくてこわくて、胸のこころへんに固い石のような物が詰ってくるのよ」

「——だっていつかは、……そいつばかりはしようがないだろう」

「だからそう思うの、いつかは死ぬんだから、せめて生きているあいだ、生きてこうしているあいだだけは、紙一重の隙もない夫婦でくらしたい、これまでのどの御夫婦にもできなかったくらいに、……あたしあんたにできるだけのことをするわ、ねえ」

お孝は良人の膝<sup>ひざ</sup>を片方の手で、上から強く押しつけながら、じつとながし眼に見あげた。「身も心もあんたの思いのままよ、あんたのためならどんなことでもしてあげてよ、ねえ、だからあんたもいつまでも変らないであたしを可愛がってね、よそのひとに気をひかれた



り、あたしに隠れて浮気なんか決してしないでね、ねえ、よくって」

「——私にはそんなはたらきはならないらしい、だいいち先方で相手にしないよ」

「うそうそ、あんたにはおんな好きのするところがあるわ、あんたを見ているとなにか世話をしたくなるの、男ぶりだけじゃなくひとがらがそうなんだわ、おたみだってあんたを見るよきの眼つきはべつなんだもの」

「——ばかなことを」

時三は眉をしかめ、顔をそむけた。

「あら本当よ、まきちやう檣町にいたじぶんだつて、近所の娘さんたちに騒がれたつてこと知つてるわ、うたざわ歌沢のお師匠さんのことだつて、……いやよあたし、これからもしそんなことがあつたらあたし生きちやいないわ、ねえ、いいこと」

「——いったいどうしたんだ、今日は」

時三はこんどは不審そうにお孝を見た。

「——へんなことばかり云つて、本当にどこかぐあいでも悪いんじゃないのか」

「ぐあいなんか悪くはないわ、それにちつともへんなことなんて云やしなくてよ、あんなにはあたしの気持がわからないからそんなふうに聞えるんだわ、そうよ、あたしのこと

なんて、……あんたはちつとも思つて呉れてやしないんだわ」

「ばかなことばかり云つて、わけがわからない」

こう云いかけるまにお孝は袂たもとで顔を押えて、時三の膝へ泣き伏してしまった。もちろん悲しいのではない、むやみに切ないようなもどかしいような気持で、泣いてしまうよりほかに自分で自分の始末がつかかなかつたのである。

結婚してから約半年めのその日が、お孝の気持にかなりはつきりと一種の転機を与えた。それは良人が自分にとつて絶対にかげがえのないひとだということ、もし良人がよその女に心をうつしてもしたら、本当に自分は死んでしまふだろうということであつた。……結婚した女ならそう思わない者はないだろう、ごく普遍的な感情であるが、お孝のばあいはそれがやや極端であつた。

下町そだちはいったいにませるものだが、お孝は珍しいくらいおくで、その年の三月、二十歳で時三を迎えるまで男などに気をひかれた覚えは殆んどなかつた。家は三代続いた袋物商で、采女町うねめちやうの「田村」といえば一流の店でおつていた。田村から出て店を持つたものが七軒あり、これをたなうちといつて、親類同様にでいりしているが、この人たちがはやくからお孝に縁談をもちだしてきた。それはお孝がひとり娘だからどうせ婿を取ら

なければならぬ、「本店」ほんだながおちつかないとたなうちも安心できないという公式論であった。……その裏には「本店」をめぐる親類やたなうちの、一種の競争のようなものもあつたらしいが、それはべつとして、お孝もうすうす感じていたのは、父親の伊兵衛の問題であつた。

お孝の母はいねといつて、お孝の九つの年に亡くなったが、家つきの娘で、伊兵衛は店で育つて婿になおつたのである。いねはお孝よりずっときりよう縹きりよう緻ようよしだった。なにがしとかいうえぞうしや絵草紙屋が、一枚絵にしたいと云つて交渉に来たこともあるそうで、これはもちろん謝絶したが、そのくらいきれいだった代りにが弱く、医者のでいりの絶えることがなかった。……そんなところから、気性の知れた温和な、酒も煙草ものめない伊兵衛が選ばれたものらしい。……予想どおり伊兵衛はいい良人だった。いねはお孝を産んでから一年の半分は寝ているというふうで、小田原町の太川に近いこの家も、彼女の療養のために建てられたものであるが、伊兵衛はその小田原町の家と店とを往復する以外には、横丁へも曲らないというくらいに、忠実に妻に仕えとおした。

妻が亡くなつてから、当然あとのほなしがいろいろ出た。しかし伊兵衛は柔和にうけながすばかりで、どうしてもあとを貰おうとはしなかつた。……お孝にはやく婿を取らせよ

うという、周囲の人たちの気持には、そうしたあとで伊兵衛を隠居させ、しかるべきのちぞえを持たせようという、含みがあったのである。

——ねえお父つあん、どうしておつ母<sup>か</sup>さんを貰わないの、ねえ、おつ母さん貰つてよ。

十二三のお孝はそんなことをよく云つた。それから暫く経つと、常磐津<sup>ときわづ</sup>やお針の稽古へいつて、そこで聞く世間ばなしが、しばしば男女間の艶<sup>えん</sup>聞<sup>ぶん</sup>に属し、ことに男というものが浮気で悪性だという定説になつていることを知り、こんどは父親に対する不信と疑惑に苦しめられた。……伊兵衛はその前後から釣り道楽をおぼえて、ときどき夜釣りなどについて朝帰ることがあつた。そんなときお孝はあて推量で、父親がよそに愛人をかこつていて、その人のところへ泊りにゆくに違いないと思ひ、胸が半分に縮まるような、呼吸困難に近い苦しい気持におそわれるのであつた。

——ねえ、本当に釣りにいったの、よそへ泊つたんじやないの、ねえ、本当に釣りにいったの。

こんなぐあいになるさく云つて、しまいにはいつしよに付いていったことも幾たびかあつた。伊兵衛はその頃からお孝と小田原町の家へ移り、飯炊きの老婆と女中を使つて、父<sup>お</sup>娘<sup>やこ</sup>二人さし向いの生活を始めた。……妻と娘とが交代したかたちである。店と小田原町と

を往復するほかには、やっぱり横丁へも曲らないといったふうで、夜釣りも近くの寒さむさば橋しのあたりで満足した。

寒橋というのは小田原町から築地つきじ明石町へ渡したもので、京橋堀と見当堀が大川へおちるおちくちにあった。汀みぎわに大きな石のごろごろした、吹きさらしの、「さむさ橋」という俗称のびったりする観景である。……伊兵衛はそこで釣りをした。寒い季節には布子ぬのこを重ねたうえから羅紗らしゃの古いみちゆきを着て、もうろく頭巾ずきんをかぶって、崩れた石垣の上につくねんと糸を垂れている。お孝はそんな恰好をしばしば見にいった。

家から近いので、眠れないときなどは、熱い湯茶を持ってゆき、父のそばに身を跼かがめて、暗い大川の水を眺めながら、ながいこと時を過すこともあった。

—— 軀からだのぐあいのいいときには、おつ母さんも茶や弁当を持って来て呉れたもんだ。

伊兵衛はときにそんな話もした。

—— 目黒から来たおとりという女中がいて、それに持たせて来るんだが、……おまえが今そうしているそこんとおとりに躡のんで、いつまでも私の釣るのを見ている、……おとりは眠いさかりだから迷惑なはなしだ、よくいねむりをしたつけ、……そうするとおつ母さんも笑いながら、しかたなしに帰ってゆくんだが、……その笑い声がまだ耳にのこっている

ようだ。

お孝にもそのようすが見えるようだった。病弱な母と温和で実直な父との、互いに<sup>いたわ</sup>励りをこめた静かな愛情、初冬のやわらかい日ざしのような、透明な暖かい愛情、それがお孝にだんだんとわかつてきた。

——お父つあんがあとを貰わないのも、よそに好きな人をつくったり、浮気をしたりしないのも、亡くなったおつ母さんが忘れられないからだ、二人はそんなにも愛しあっていたんだ。

お孝はそう思った。世間では男は浮気で悪性と定説になっている、そういう事実も見たり聞いたりする。父のような人はおそらく<sup>まれ</sup>稀だろう、とすれば男なんていやらしい、どんなことがあっても結婚なんかしない。……こんなふうの一つの信条さえもつようになった。軀のほうも発育がおそかったらしいが、父親のほかには男などまっぴらという気持だった。結婚して半年めぐらいからの、良人に対する激しい愛着心は、うがって云えばその反動でもあろう、発育のおくれていた軀や心が、にわか<sup>や</sup>に生き生きと成長し始めたためもある。いずれにせよ、男と女の愛情というものが、身を<sup>や</sup>灼くように楽しく、一面にはこんな<sup>や</sup>に苦しく哀しいものかということをお孝も自分で体験する時期になったのである。

## 三

一年と経ち二年と経った。

時三が来てまる二年めの五月、父の伊兵衛がとつぜん吐血して倒れた。医者は胃に潰かいよ瘍うが出来たという診たてで、そのまま九月まで寝とおした。この期間ずっと、伊兵衛の世話は女中のおたみが独り占めでやった。まず喰べ物を作るのが手間と時間をくうし、温石を当てるとか胃部を冷やすとか、薬を煎せんじるとか便器のめんどうをみるとか、動くことを禁じられていた病人なので、看護にはたいへん手数と努力が必要だった。……お孝も傍観していたわけではない、つとめて世話をしようとするのだが、おたみが先へ先へと奔走するし、当の病人からしておたみにかかりたがった。

「それはおたみにさせるからいい、おまえはそつちにすることがあるんだろう、構わないからそつちのことをして呉れ」

こんなふう云って、なるべくお孝の手を避けようとした。

「へんねえ、なんだかへんだわ、まさかと思うけれど……どうしたのかしら」

「へんなことはないさ、おまえは私のこともしなくちやあならないし、おたみならかかりつきりになれるからさ、……動けない病人には看病の手の替ることがいちばんいやなものらしいよ」

「それはそうかもしれないけれど、でも……」

お孝は良人とそんなことを話しながら、ひとつ頭にひっかかるものがあつた。それは去年おたみに縁談があつて、又とないくらい良縁だつたのをおたみが断つた。……おたみは南千住に家があり、十五の年から奉公に来ている。お孝より一つ下で、気はしもきくし縹緖も悪くない、いわゆるおかめ型のぽちやりした、軀つきも小柄な愛嬌あいぎょうのある娘だつた。……それまでにも幾たびか縁談があつたが、いつもまだ年が若いからと首を振つていた。

——あたし一生お孝さんのそばにいたいんです、お嫁にゆくのならなんかいやなことつてすわ。こう云い張つていた。しかし去年のときはもう二十にもなるし、断わる理由がどうにもわからなかつたのである。お孝は冗談のように、

——あなたが好きだからよ。

などと良人に云つたことがある。それには時三が婿に来てから、おたみのようすがどこ



となくなまめかしくなり、時三になにか云われたりするとふと顔を赤くしたり、またしおのある眼つきでじつと見たりした。……いつか六間堀へ菊見にいったとき、思わずそのことを良人に云つて、不愉快そうにそっぽを向かれたことがあるが。……父が病氣になつてからのようすを見ると、やはりそこにあたりまえでないものがあるような感じで厭いやだった。「いいじゃないか、お父つあんが氣にいつてるんだから、おたみだつていやいやしているんじやあないし、氣を揉もむことはないじゃないか」

「あたしつてやきもちやきなのかしら」

「あつさりしているほうじやあなさそうだな」

「——憎らしい、あんたのせいよ」

「またそれか、よく飽きないものさ」

「だつて本当なんですもの、あんたといつしよになるまえには夢にもこんな氣持は知らなかつたわ、こんな氣持つて、……本当に自分でもいやよ」

あんたのせいよと云う言葉は無根拠ではなかつた。時三は日本橋榎町の「松葉屋」という、やはり袋物商をしている家の二男で、男ぶりもいいし職人はだで、近所の娘たちにはいぶん騒がれたというし、稽古にかよつていた歌沢の若い女師匠とは、かなり深いつきあ

いがあったということを知っている。……もちろん結婚するまえにきれいに片がついていたらしいが、いっしょに生活してみると、そういう事実があったらうということが、お孝にはよくわかった。

時三は田村へ来てからも、店に坐るよりは仕事をやるほうを好んだ。店是他吉という番頭に任せて、自分は一日じゅう仕事場にこもっている。あいそつけはないし口数は少ないし、いつもむつとしたような顔をしているが、そこにちよつと説明のつかない強い魅力があった。……一手にひきうけて世話をしやりたいとか、思いつきり虐めてやりたいとか、薄情なめにあつて泣かされてみたいとか、それぞれ気性によつて違ふだらうが、いずれにせよ彼を見ているとなにかかまつてみたくなる、要するにほうつておけない気持になる。

——これがおんな好きのするつていう型なんだわ、いちばん危ない型だわ。

お孝は自分の身にしみてそう思った。

結婚してまる二年も経ち、疑わしいようなことはいちどもなかった。良人が誠実であるということは慥からしい、嫉妬などする余地は少しもない。こう安心していながら、一方ではそんな筈がないという気持がぬけず、ついすると良人をうるさがらせ、自分でもいやになるようなことを云つてしまう。

——みんなあんたのせいよ。

お孝としてはこう云うよりほかに立つ瀬がなかつたのである。

#### 四

伊兵衛は九月の下旬にとこぼらいをした。

そのちよつと前のことであるが、或る夜ふつと眼がさめると、いつも点いている有明行ありあ燈けが消えていた。油でもきれたのかと思つて、そのまま眠ろうとしたが、どうしてか眼が冴さえてしまつて眠れない。暫くしてそつと起き、音を立てないように気をつけて手洗いにゆこうとした。……すると廊下の向うですつと襖ふすまの明く音がし、ひと言、低く誰かの囁ささやく声が聞えた。父がおたみになにか云つたのだらうと思ひ、廊下へ出ると、足音がこつちへ来た。高いれんじ窓はあるが夜中のことで、まつ暗でわからない。お孝は用心して、

「——だあれ、おたみかえ」

と声をかけた。ぶつつかつてはいけなかつたからだ。すると向うは気がつかなくなつたとみえ、よほどびつくりしたようすで、

「——私だ、……どうしたんだ」

へんにうわずった声で時三が答えた。

「あんたなの、暗くってわからなかつたわ」

「——どうしたんだ、そんなところで、……なにをしているんだ」

「ばかねえ、こんな時刻になにをするわけがないじゃないの」

お孝は低く笑いながら、

「ああ気をつけてね、行燈が消えててよ」

こう云って良人とすれ違った。もういちどはもとの常磐津の師匠が病気だということで、四五人の稽古友達とみまいにゆくことになった。おたみの手はなせないの、みまいの品を持って独りででかけたが、帰りにはみんなで夕飯をすることになっていたから、念のため采女町の店へ寄った。

「たぶん日本橋の花川だと思うの、お文ちゃんもよんちゃんもいける口だから少しおそくなるかもしれないけど、……もし早かったら榎町へちよつと顔出しして来ますからね」

良人にこう断わっていった。

師匠の家は木挽町三丁目にある。もう五十六七になる陽気な人で、腰の筋を違えたと

いうだけの、病気とはいえない軽い故障だった。集まった友達はみんな結婚していたし、下町で育つて下町ぐらしの、それぞれ活いきのいい者ばかりだから、いっそ花川などはやめて此こ処こで賑にぎやかにやろうということになり、たちまち受持をきめて必要準備をととのえ、正ましく賑にぎやかに酒宴を始めた。

音頭取りはお文ちゃんであった。お孝とは隣りづきあいの幼な友達で、家は佐野庄という大きな足袋屋、お孝より二年はやく婿を取つて、もう三人の子持ちだった。

——亭主なんてのさばらしちゃだめ、暴れ馬を扱くつでやるのよ、がっちりくつわ轡かを嚙かませてぎゆうぎゆう手綱を緊めておくの、あたしなんかぐつとも云わせやしないわ。

こんなふうに威勢がいい。女中のおたみもお文ちゃんが世話をして呉れたものだ。……なにがさてみんな二十二三の若い世帯持ちで、いっぱし世間の味を知つたつもりでいるのだから、少し酒がはいると一座は壯觀を呈してきた。お孝もいくらか飲める口ではあるが、あまりにみんなの話が刺戟しげき的てきなのと、いつもより少し過したせいかまもなく気持が悪くなり、とうていつきあいきれないと見込みをつけ、うまくごまかして独りだけ先にぬけだした。

時刻はまだ早かった。外へ出て風に当たつてみるとさしたることもない、榎町へゆこうか

と思つたが、それも億劫おっくうで、店へも寄らず家へ帰つた。……すると、——もともと寮ふうに造つた家で、かなりな庭にふじつぼの殻からの付いたしびの垣根をまわし、萩を編んだ折戸の小さな門があるが、——その門をはいるとすぐその、袖垣の蔭のところに時三とおたみが立ち話をしていた。

このときはどきりとした。おたみは泣いているらしい、良人は腕組みをし、うなだれて、なにか低い声で話していた。ほんの一瞬のことだったが、お孝は足が竦すくみそうになつた、しかしそれより早く良人がこつちへ振返つた。……門のあく音で気がついたのだろう、こつちへ振返つて、おちついた眼つきで、

——いいから家へあがれ。

というような合図をした。そのおちついた眼つき、少しも慌てたようすのないそぶりでお孝はほつとし、黙つて家へはいつたが、着替えをするときもまだ胸がどきどきしていた。「お父つあんに叱られたんだ、おまえは知らないつもりでいるほうがいい」

あとから来て時三はそう云つた。

伊兵衛がとこぼらいをしてから、おたみのようすがどことなく変つてきた。いつも浮かない顔をしていて、これまでついぞないことだが皿小鉢を破わつたり、腹ぐあいが悪いとい

つて四五日も黙つて寝ていたり、また夜中にお勝手に嘔はこうとして、いやな声をだしていたりした。

そうしておたみは十月の末になつて、軀の調子が悪いからと、急にひまを貰いたいと云いだし、ひきとめる手を振切るようなぐあいには実家へ歸つていった。

「どうしたんでしょ、七年もいて家の者も同様にくらしして来たのに、なにが気に障つてあんなふうに出ていったのかしら」

「——急に嫁のはなしでもあつたんだろう」

時三はこう云つていた。

「——どうせ死ぬまでいる者じゃなし、いつかは出てゆくんだから、私の病気もおちついたところだしいいじゃないか」

伊兵衛もこう云うだけだった。お孝は多少にくらしいと思つたが、そのままにしておけないので、嫁にゆくゆかぬはともかく、かねて予算していただけの品物を買そろい揃え、それ相当の金も包んで、南千住の実家というのへ届けてやった。

半月ばかりして女中のはなしが出たが、子供でも生れるまでは用もないので、お孝は自分でやつてゆくことにきめた。

「それにしてもへんねえ、あたし赤ちゃんが出来ない軀なのかしら」

「子供なんか急ぐことはないよ」

「だつていやなのよ、友達に会うときまつてからかわれるんですもの、……あんまり仲がよすぎるんだとか、お迎えが激しすぎるんだとかつて、ねえ、本当にそんなことつてあるのかしら、仲がよすぎると、……あらいやだ、へんなこと云いだしちやつて、あたしどうかしてるわ」

「独りではしゃいで独りで赤くなつてりやあ世話あねえや」

「いいじゃないの、おたみがいなくなつてから初めてしみじみした気持になれたんですもの、初めて夫婦さし向いつて気持なんですもの、これで早く赤ちゃんが出来れば申し分ないんだけど、……あたしどこか信心してみようかしら」

年があけて正月の二十日に、常磐津の師匠の総ざらいがあつた。毎年の例で、三十間堀の「半勝<sup>はんかつ</sup>」という貸席でやる。当日は古い弟子もみんな集まつて景気をつけるのだが、そこではごくたまにしか会えない人に会い、いろいろ情報も聞けるので、古顔は一種の親睦会のように心得ていた。……ここでも経済的な意味ばかりでなく、性来の世話やき好きでお文が采配<sup>さいはい</sup>を振り、総ざらいが終るなり師匠を拉<sup>らっ</sup>して来て、



「さあこれからお師匠さんのとこあげ祝いよ」

などと氣勢をあげた。弟子たちの家からも祝いのお重やひろふた蓋がたくさん届いている。

そのうえ近所の仕出し屋から酒肴さけさかなを取って、去年の病気みまいどころではない、華やかで大掛りな宴会が始まった。……こんどは男もかなりまじっているのです、女たちの騒ぎには限度があつたが、それだけごとく色っぽい空気がただよい、いい年のおかみさんふうの人までが気取って笑い声をたてたりした。

「お孝さん、ちよつと」

盃さかずきがまわりだしてからまもなく、お文が来て坐つて、うす笑いをしながらこつちを見た。

「どうした、あんたの旦那旦那つく、この頃はおとなしくしている」

お文はわざとそういう口をきく、奮闘したあとで酒がはいつて、酔つてもいるらしい、白粉はの剥はげた頬はたんきようが巴旦杏はたんきようのように赤く光つていた。

「この頃つていつたつて、うちじやあいつも同じことよ、たいしたことほもなしだわ」

「そんなこと云つてるからいけないんだ、あんたは旦那ほつくに惚ほれちやつてるんだから、ねえいいこと、夫婦であろうとなんであろうと、男と女のあいだじゃ惚ほれたほうが負けよ、向うに惚ほれさせなきやだめよ、……そりやあ時ほさんはいい男でしょ、あたしだつてちよい

と浮気がしてみたくなくなるくらいだけど、だからよけい弱味を見せちゃいけないの、……それをあんたはあけっ放しなんだから、あけっ放しで惚れきってるからあんな事になるんだ、なによ、……相手が吉原なかとか柳橋やなぎばしあたりで、だれそれといわれる姐ねえさんならともかく、女中に亭主をとられるなんて女の恥じやないの」

お孝はあつけにとられた。お文がそんなに酔っているのかと、つい笑いながら顔を見なおした。お文はそれをどう取ったものか、ひどくいきごんで云い続けた。

「おまけにお孝さんときたら、あとから着物や、小篋こだんすなんぞ買って、お金まで付けて遣やったというじゃないの、いまに赤んぼが生れたら引取って育てるなんて云うんでしょ、あたしだったらおたみななかびりびりにひっちやぶいてやるわ、しっかりしなさいよお孝さん」

「——おたみって、おたみがなにか……」

「あたしに隠してどうするの、おたみを世話したのはあたしじゃないの、あたしお孝さんに申しわけがなくて、だからよけい肚が立って、南千住まで行ってそ云ってやったわ、……もう決して若旦那には会いません、赤ちゃんを産んだら田舎へひっこんでくらしめますって、……神妙な顔で泣いてたけど、心のなかでなにを考えてるか知れたもんじゃないわ、

いつも云つてるでしょ、且つくにはがっちり轡を嚙ませて、手綱をぎゆうきゆう緊めていなければいけないって、……あんたは甘いから……」

お孝はもう聞いてはいなかった。軀がぐらぐらして、倒れそうな気持で、やがて激しい嘔きけにおそわれて座を立った。

## 五

それから五日五晩お孝は思い惑った。

お文の話しぶりはずばりとしていて、思い違いではないかという隙が少しもなかった。要約するもしないも、良人とおたみがそういう仲になり、おたみがみごもったので実家へ帰った。それだけの事実をはつきり事実として語っている。南千住の家まで訪ねてゆき、そこでさんざん怒つて、おたみが泣いて詫わびたという。なかでも——もう若旦那には決して会わない、という言葉は辛しんらつ辣であつた。それは疑いもなく二人の仲を立証する言葉だつた。

——本当だろうか、……いやそんな筈はない、あのひとがおたみにそんなことをする筈

がない。

そう思えば思うほど、お孝にも幾つか疑わしい記憶がよみがえってきた。有明行燈の消えていた夜のこと、袖垣の蔭で良人と二人きりでおたみが泣いていたこと、それから良人が来てからのおたみのなまめいたようすや、じつと良人をみるしおのある眼つきなど。

そうしてとうとう耐えかねて、六日めの夜になって、お孝は良人にそのことをきいた。この瞬間に自分の生き死にがきまるといふ気持であった。

「本当のことを云つて頂戴、あたしおちついて聞くから、……ねえ、決して騒いだりなんかしないから、本当のことを聞かして頂戴」

時三は黙つて自分の膝を見ていた。こころもち額が白くなったようである、それからやや暫くして、つぶや呟くように云つた。

「——濟まない、勘弁して呉れ」

「いいわよ勘弁して呉れなんて、いいのよそんなこと」

お孝は慌てて笑いながら遮こへぎつた。自分でもふしぎなくらい明るい笑いかたで、寧むしろうきうきした調子でさえあつた。

「本当のことがわかればいいの、それで、……おたみはいつごろお産するの」

「——今年の五月だったと思うが……」

「そう、五月ね、それを聞いておかなくつちやあ、……だって知らん顔をしているわけにはいかないでしょ、お産するとなればいろいろ、……あたしとしたって、してあげなければならぬことがあるし、……でもわかってよかったわ、あたしちつとも知らなかったんですもの、よつぽどばかであぬけてるのね」

「——お孝、おれが悪かった」

時三は顔をあげてお孝を見た。きれいな澄んだ眼に涙が溜たまっていた。

「——魔がさしたんだ、……まちがいだったんだ、本当に悪かった、勘弁して呉れ」

「いいわよ、もういいのよ、誰にだってまちがいということはあるわ、あたしだって、……あら、お父つあんが呼んでるんじやないかしら」

お孝はあたふたとそこを立った。

良人の前ではとうとう泣かずに済んだ。恨むこともできなかつた。そしてそれから二三日は気分も明るく、ふだんと同じように笑ったり、陽気にお饒しやべ舌りをしたりした。……だが或る夜、良人が自分の夜具へ手をかけたとき、その瞬間、お孝は激烈な嘔なげきけを感じ、お勝手へいって、嘔なげこうとして、こんどはとつぜん胸をずたずたにひき裂かれるような、

非常な苦悶と絶望におそわれ、呻き声をあげてそこへ倒れた。

「お孝、どうした、どうしたんだ」

こう呼ばれて我にかえると、自分が良人に抱き起こされていた。お孝は頭を振り、笑おうとした。なんでもないので、こう云おうとして、抱いている良人の手のぬくみを肩に感じたとき、蛇にでも触ったように、総身を震わせ、叫び声をあげて良人の手をすりぬけた。

「——お孝、いったいどうしたんだ」

「あつちへ、……あつちへいつて、……なんでもないので、あたしだいじよぶよ、……あつちへいつて」

全身の震えで揚板ががたと鳴った。時三は暗がりのなかでじっとこちらを見つめていたが、やがて黙ってお勝手を出ていった。

それからお孝の苦しみが始まった。その苦しきは肉躰的なもので、まず嘔きけが起こり、ついで胸を搾木にかけられるか、ひき裂かれてもするような気持になる。眼の前が急にまっ暗になり、息ができなくなり、そのまま気が狂ってしまいそうな感じにおそわれる。

「——ああ、……ひどい、……あんまりひどい」

肩で喘ぎながら呟いて、身もだえをして、誰にも見られないところへいつて泣く。

「——なによ、このくらい、ざらにあるこっちゃないの、平気じゃないの」

泣きながらこんなことも云つてみる、しかしそう云いながらまた身をもだえ、転げまわつて、絶叫したいような衝動に駆られるのであつた。

その日は朝から南風が吹いて、気持の悪いほど暖かかったが、風がおちてからも気温が高く、花でも咲きそうな陽気だつた。このところまた胃の調子がいけないらしく、沈んだ顔色をしていた父が、その夜は気分がいいとみえて、夕食のときには久しぶりに釣りの話などした。

「こんな晩はあなごがくうんだがな、……しかし海ばかりやって来たから、今年はひとつふな鮒をやつてみようかと思う、……榎町じゃたしあ慥かそのほうのてんぐ天狗だつたな」

「親父のは口ばかりですよ、釣りにゆくんじやなくて酒を飲みにゆくんですから」

「いや釣つたものをそこで作つて飲むのが釣りの本ほん味だあじというくらいなんだ、私は飲めないからだめだが……」

お孝は二人の話を聞きながら、寒橋の夜の河岸かしを思ひだしていた。

父が寝て、良人が寝てから、暫く解き物をしていたお孝は、ふいと誰かに呼ばれるような気持で、膝の物を押しやつて立ち、音を忍ばせて裏口から外へぬけだした。……十一時

ごろだろう、近所は戸を閉めて寝ていたが、ところどころ灯がもれ、楽しそうな話し声の聞える家もあった。まっすぐに河岸へぬけ、寒橋の、いつも父の坐る崩れた石垣のところへいつて佇んだ。たたす

川上の佃つくだじま島のほうに、舟で燃す火がぼつと霞かすんで、点々と五つ六つ見えた。白魚しらうお網あみだろう、そのあたりから水面を伝って、人の声がとぎれとぎれに聞えて来る。

「——おつ母さん」

お孝はそつと呼んだ。父親がそこに釣糸を垂れている、母が女中に茶や弁当を持たせて来て、父のそばへいつて跼む。

——来なくつてもいいのに、風邪でもひいたら困るじゃないか。

——でも寂しくつて、……寝られなかったから来てみたのよ、お茶をあがったら。

——濟まないな、ちようど欲しいところだった、おまえそうしているならこれをちよつとひっかけているがいい。

——あらいいのよ、それじゃああんたが寒いわ。

父と母とのこんな会話が、現にそこでとり交わされているように、ありありと聞える気がした。父と母との穏やかな、まじりけのない温かな愛情、お互いに舐りあい相手に誠実



であつた愛情、……それがそのまま、寒橋の岸のその石のところに、そのまま現に残つて  
 いる、二人の愛情は今でもそこに生きている、そこに、その石の上に、……お孝にはそれ  
 が眼に見えるように思えた。

「——おつ母さん、あたし苦しいの、生きてるのが辛いよ、ねえ、……おつ母さん、  
 あたしどうしたらいいの」

お孝は暗い水を覗きこんで云つた。

「——こんなに苦しいのに、あのひとが憎めない、憎いんだけど離れられない、まえよ  
 りもあのひとが恋しくつて、それでそばへ寄せられると鳥肌の立つほどいやで、……独りに  
 なる死ぬほど苦しくなるの、ねえ、どうしたらいいの、教えて、おつ母さん、ねえ、あ  
 たしどうしたらいいの」

たぶたと岸を打つ波の中から、母の顔がすつと浮きあがり、手招きをしながらこう云  
 った。

「——おいで、お孝、こつちへ、おつ母さんのほうへおいで……」

お孝はぞつと総毛立った。あまりにはつきり聞えたからである。そして後ろへさがろう  
 と思ひながら、ふらふらと逆に足が前へ出たとき、強い力で激しく肩を抱き締められた。

「ばかなまねをするな、お孝」

耳もとでこう叫ばれ、はつとして、身をもがいてその手を振放した。

「なによ、なにがばかなことよ」

お孝は髪へ手をやりながら云った。

「むしむしして頭が痛いから、ちよつと川風に当りに来たんじやないの」

「——お孝……」

時三は大きく喘ぎながら、ごくつと唾をのみ、片手を妙なぐあいには振って、それからしやがれたような声で云った。

「すぐ帰つて呉れ、お父つあんが悪くなつたんだ、おれはこれから医者へいつて来る」

「——お父つあんが、どうしたんですつて」

「また血を吐いたんだ、まえよりたくさん吐いた、すぐ帰つて、濡れ手拭で胃のところを冷やして呉れ、医者を呼んで来るから」

「——お父つあんが」

こう云いながらお孝はもう駆けだしていた。

良人がなにか叫んだようだった。けれどもお孝はなかば夢中で走り、家へ着くまでに二

度も転んで、片方の膝をひどく擦剥すりむいた。……父は仰向けに寝て。胸の下まで夜具まくを捲つて、枕から頭を外していた。顔はきみの悪いほど蒼あおく、頬がこけ、汚れた口をあけて、急速な浅い呼吸をしている。拭くひまもなかつたのだろう、そのあたりはまだ汚れたままだつた。お孝はできるだけおちついた動作で枕もとへいった。

「お父つあんどう、……苦しい、いまうちでお医者へいったからすぐ来るわ、少しの辛抱だからしつかりしててね」

「——大丈夫だ、もう苦しくはない」

伊兵衛は眼だけをこちらへ向けた。

「——それよりお孝、おまえに話がある、もつとこつちへ寄つて呉れ」

## 六

「だつていま話なんかしちやだめよ、お医者の来るまで静かにしていなくつちや」

「いや聞いて呉れ、いま話さなくつちやあ話すときがないんだ、……私は、お孝、……おまえにも済まない、時三にも済まない、……いいか、うちあけて云うが、お孝、……おた

みが産むのは私の子なんだ、時三のじやあない、おたみはこの伊兵衛の子を産むんだ」

ああとお孝は息をのんだ。

「時三は私を庇かばって呉れた、親の恥を身に衣きて呉れたんだ、おたみにもそう云い含めたらしい、……おまえにも決して云うなど、あれは私にそう約束させた、……だから黙っていたんだ、けれど、もうこんどは私もいけないという気がする、このままでは死ねないからうちあげたんだ、お孝、……わかったか」

「——お父つあん」

お孝はとつぜん父の手を握り、その手に頬ずりをしながら泣きだした。

「——うれしい、お父つあん、うれしいわ、あたしうれしい」

そしてまるで笑うような声で遠慮もなく泣いた。伊兵衛は眼をつぶって、そつと頷うなずきながら云った。

「おまえが苦しんでいることは、私はよく知っていた、……さぞ辛かったろう、身も世もない思いだったろう、……だが事情がわかってみれば、私のあやまちだということがわかれば、もうその苦しさもなくなる筈だ」

お孝はまだ泣きながら、自分の涙で濡らした父の手の上で頷いた。

「人間は弱いもんだ、気をつけていても、ひよつと隙があれば、自分で呆れるようなまぢがいをしてかす、……だれかれと限らない、人間にはみんなそういう弱いところがあるんだ、……ここをよく覚えておいて呉れ、いいか、……そんなこともあるまいが、長いあいだには、時三も浮気ぐらいするかもしれない、……そのときは堪忍してやれ、夫婦のあいだのまぢがいには、お互いに堪忍しあい、お互いに忬り、助けあってゆかなくちやならない、それが夫婦というものなんだよ」

父の言葉をはつきり聞きとめようとしながら、お孝はもう幸福とよろこびで頭がいっぱいになり、軀が溶けるような思いで泣き続けた。

「——約束だから、この話は、おまえの胸ひとつにしまっておいて呉れ、……みんながそのつもりでいるんだから、時三にも云つちやあいけない、わかったな」

伊兵衛はこう念を押して口をつぐんだ。

それからほんの僅かして医者<sup>いしや</sup>が来た。けれども手当てにかかる暇もなく、また大量な吐血<sup>こんすい</sup>があり、昏睡<sup>こんすい</sup>状態<sup>じょうたい</sup>になって、日本橋のほうの蘭方医<sup>らんぽうい</sup>を呼ぼうと、使いを出してもなく、伊兵衛は昏睡したままついに息をひきとった。

三七日<sup>さんしちにち</sup>が済むまでは、お孝は身も心も自分のものようではなかった。時三が心配し

て、坐つていればいい、なにもするなど庇つて呉れ、じつさいまたそう働くこともなかった。それでいて絶えず追いたてられるように、そわそわとおちつかず、夜も熟睡することができなかつた。

「そんなことはないよ、ゆうべなんかいびきをかいて眠つてたぜ、私が二度も起きたのを知らないだろう」

良人はそう云つて笑つたが、自分ではそうは思えない、慥かに一晚じゆう眠れなかつたようで、昼になると疲れて眠くてしかたがなかつた。

三七日には寺で法事をしたあと、金六町の「菊屋」で客に接待をした。みんなで三十人ばかりだったが、諸事たなうちの者が奔走するので、お孝は坐つて挨拶だけしていればよかつた。……接待が済んで、いちど店へ寄り、小田原町へ帰る頃にはすっかり昏くれて、家にはあかあかと灯がはいっていた。

留守番の者もかえし、二人だけになつて、ほつと息をついて顔を見合せたとき、お孝はこび媚のある眼で良人に頬笑んだ。

「たいへんだつたわね、疲れたでしょ、なにもかもあんた一人にして貰つて、……本当に悪かつたわ、……ごめんなさいね」

「自分の親のことじゃないか、おまえに礼を云われることはないさ」

「お父つあんうれしかつたと思うわ、なんにも心残りはないし、こんなにして貰って、生みの子にだつて出来ないことをして貰って、本当に安樂に死ねたと思うの」

「そんなことがあるもんか」

怒つたようにこう云つて、時三はふと脇へ眼をそらした。二十日あまりの心勞が出たものだろう、頬が少しこけて顔色も悪い。彼はいつたん脇へそらした眼を伏せ、湿つたような低い声で呟いた。

「私は心配のかけつ放しだつた、これから少しは孝行のまねごともしようと思つていたんだ、……いま死なれちやあどうしたつて気持が済まない、おれは諦めきれないんだ」

「いいえそうじゃない、あたしみんな知つてるの、お父つあんはあなたにお礼を云つてるわ、あたしだつてどんなにうれしいかわからない、うれしくつて、……どうお礼を云つていいかわからないわ」

お孝は襦袢じゆばんの袖でそつと眼を押えた。時三は不審そうにこつちを見て、まるで傷口にでも触れるように云つた。

「——みんな知つてるつて、……いつたい、なにを知つてるんだ」

「おたみの産む子が誰の子だかつていうこと、あの晩あんたがお医者へいったあとですっかり話して呉れたの、あんたがお父つあんの恥を身に衣て、自分のまちがいのようにとりつくろつて、おたみにまでそう云い含めて呉れたということをや、……あたしばかりだから、そうとは気がつかずにあんたを怨うらんだわ、苦しくつて悲しくつて、……生きているのが辛かったわ、……だからうれしかった、うれしくつて、あんまりうれしくつて、……もういつ死んでもいいと思つたわ」

「——お父つあんが、そう云つたのか、お父つあんが、おたみの産む子は、……お父つあんの子だつて」

「あんた、堪忍して」

お孝は良人の胸にしがみついて、ふるえながら頬を良人の胸にすりつけた。

「あたし自分のことしか考えなかつた。可愛がられることばかり思つて、あんたの身になつてみる気がなかつたの、お父つあんがそ云つたわ、……人間は弱いもんだつて、夫婦はお互いに許しあい、助け助けあつてゆくもんだつて、……あたしようやく大人になつたよ。うな気がするの、おたみのことがもしあんたのまちがいであったとしても、こんどは、その半分はあたしの責任だと思ふことができるわ、ねえ、……あたしこれからいい妻になつて



よ、だから堪忍して、……これまでのことは堪忍して頂戴」

そうして甘く嘔<sup>むせ</sup>びあげるお孝を、時三は黙って抱き緊め、その頬へ自分の頬を押しつけた。涙に濡れて火のように熱い頬である、時三は眼をつむり、抱いた妻の軀を、子供でもあやすように、静かに揺すった。

「おたみが子を産んだら、うちへ引取つて育てさせてね、……あなたには済まないけれど、あんたの子にして、……そうすれば、貰い子をすれば、子供が出来るといふから、あたしにも赤ちゃんが出来るかもしれないわ」

「——もしおたみが放したらな」

「おたみはこれから嫁にゆく軀ですもの、わけを云えば放すわよ……ふふ」

お孝は泣き声で含み笑いをした。

「お文ちゃんがむくれるわね、いつか云つてたとおりになるんだもの、……あなたはいまにその赤んぼも引取るつていうんでしょつて、……これだけは本当のこと云えないんだから、あのひときつとまつ赤になつて怒るわよ」

その晩は絶えて久しく、そして二人がいつしよになつてから初めて、夜具は一つしか敷かれなかつた。……桃の節句も近いというのに、春寒というのだろう、珍しく冷える夜で、

火の番の柝きの音が遠く冴えて聞えた。

夜半をずっと過ぎてから、時三がそつと起きて来て、物音を忍ばせて仏壇の前へゆき、そこへきちんと坐つて、頭を垂れた。

「——有難う、お父つあん」

彼は低い声でこう囁いた。

「——もうこれつきりです、決してもうあんなことはしません、見ていて下さい、……私  
はきつとお孝を仕合せにします」

彼は腕で眼を掩おほつた。咽むせび泣きの声が彼の喉のどについてもれた。ずっと遠くで、火の番の柝の音が冴えて聞えた。

# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二十二巻 契りきぬ・落ち梅記」新潮社

1983（昭和58）年4月25日発行

初出：「キング」大日本雄辯會講談社

1950（昭和25）年2月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 寒橋

山本周五郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>